第４章　NPO 法人みやぎ・せんだい子どもの丘
～宮城の児童文化活動の伝承者、そして地域の健全育成推進の拠点～

はじめに

仙台駅から一駅の岩切駅から車で 10 分ほど走ったところにある仙台市立岩切小学校の隣に真新しい児童館が建っている。平成 18 年 4 月に開館したばかりの仙台市岩切児童館である。建物正面の壁には、ふたつの窓と子どもたち手作りのタイルで作った大きな笑顔が出迎えてくれる。まるでこの児童館の新しさと明るさをそのまま表現しているようだ。この児童館は指定管理者制度に基づいて「NPO 法人みやぎ・せんだい子どもの丘」（以下、「子どもの丘」）によって管理運営されている児童館である。

近年全国的に導入されている指定管理者制度であるが、自治体から指定管理者として委託を受ける NPO とはどのような団体なのだろうか？何か特別な団体なのだろうか？児童館を運営するに当たってどのようなことに配慮し、どのようなことを目指しているのだろうか？そのような疑問を胸に、2006 年 9 月 20 日、私たちは岩切児童館に「子どもの丘」の代表を務める平山さんを訪ね、お話を伺った。

平山さんは仙台市北山で美術学校アトリエ自遊楽校を経営するほか、宮城県生涯学習指導者養成講座の講師や仙台地域の保育科のある大学・専門学校等でも講師をされている。また年間 100 回ほど遊び歌のコンサートもされ、あふれるような元気と熱意をお持ちの方である。以下「子どもの丘」の活動について、平山さん及び芳賀館長へのインタビュー、「子どもの丘通信おだづもっこ」、「仙台市岩切児童館要覧」、そして「子どもの丘」ホームページ等の資料に拠りながら述べてみよう。

１．「子どもの丘」設立の背景と経緯

平山さんに「子どもの丘」設立の経緯を伺ったところ、話は宮城県中央児童館との関わりから始まった。

かつて宮城県は子どもの健全育成事業において「宮城県方式」と呼ばれる独特のやり方で全国的に高い評価を得ていたという。その中心施設が宮城県中央児童館であった。平山さんは大学生の頃、現在「子どもの丘」の副代表を務める新田さんとともに中央児童館のボランティア・サークル「アクターズ」のスタッフとして活動していた。そこには宮城県子ども会連絡協議会、母親クラブ連絡協議会、宮城県児童館連絡協議会など、子どもにかかわる様々な団体の事務所が集まり、それらが相互に連携をとりながら子どもに関わる活動を展開していた。平山さん自身も児童館に泊まりこみながら活動に没頭したという。

ところが、平山さんが大学を卒業してしばらくすると、中央児童館を取り巻く環境が大きく変わってしまった。県の方針も変わり、施設・設備は老朽化し、人員も削減され児童文化活動の中心的施設としての機能を十分果たせなくなってしまったのである。愛着をもって児童文化活動に打ち込んできた中央児童館にゆかりのあった人たちにとって、こうした状況はとても歯

痒いものであった。

やがて、子どもの健全育成に関する県の施策の変化に伴い中央児童館の位置づけも変わり、さらに様々な経緯を経た後、県に代わって中央児童館の管理・運営を行うための NPO を平山さんが中心となって設立することとなった。2004 年 9 月のことである。メンバーには中央児童館のボランティア･サークル「アクターズ」や「ざぶ」の OB、県の子ども総合センターの審議委員、中央児童館の元職員、県子ども会連絡協議会の会長、母親クラブの会長、児童館連絡協議会の会長、退職された学校の先生等、かつて中央児童館における健全育成活動を共にし、中央児童館への想いを共有した有志約 40 人が名を連ねた。それが「NPO 法人せんだい・みやぎ子どもの丘」である。スタッフの陣容からも分かるとおり、「子どもの丘」の活動の基盤には、かつて中央児童館で培われた活動と経験と人脈が息づいているのである。

現在も「子どもの丘」は次第にその規模を拡大しており、理事以外の正会員(年会費 3000 円)が 66 名、その他賛助会員(年会費 1000 円)が多数入会している。そこには保育士等も含め子どもに関わる様々な背景や職業を持つ方々が参加している。NPO としての活動は、後述する年 2 回のイベントの準備、岩切児童館の運営、そして不定期に「子どもの丘通信　おだづもっこ」と毎月 1 回「いわきり児童館だより」を発行し、NPO 会員とその他協力者に配布している。

２．20 年ぶりの「おてんとさんまつり」～健全育成をめぐるつながりの創出～

「子どもの丘」は中央児童館の運営のために設立されたのであるが、結局、中央児童館の指定管理者募集は建物の老朽化に加え耐震性にも問題があるという理由で取止めになってしまった。それでも平山さんたちは県と交渉を重ね、中央児童館の敷地を利用して 2005 年 5 月にはみやぎ子どもフェスティバル「おてんとさんまつり」、2005 年 11 月にはみやぎ児童文化フェスティバル「人形の森」というイベントを開催した。

「おてんとさんまつり」は大正･昭和初期から全国に先駆けて児童文化活動に取り組んだ「おてんとさんの会」にちなんで昭和 45～63 年まで行なわれていたイベントであった。「子どもの丘」はこれを約 20 年ぶりに復活させ、2005 年 5 月 3～5 日の 3 日間開催したのである。それは遊び歌のコンサート、絵本講演会、貼り絵作りや読み聞かせ、夜店やミュージカルなど様々な内容が盛り込まれたイベントであった。続く 2006 年の「おてんとさんまつり」では絵本作家の荒井良二さんによる壁画パフォーマンスや、ピエロのダイスケさんによる大道芸などプロのアーティストやパフォーマーの参加に加え、14 団体 150 人ものボランティアの方々の協力を得て、子どもたちとの様々な遊びが繰り広げられた。

2005 年 11 月に開催されたみやぎ児童文化フェスティバル「人形の森」では、仙台の複数の大学・専門学校や人形劇サークルからの協力と参加を得て、人形劇や影絵芝居、パネルシアター、絵ばなしなどが披露された。さらに折り紙やシャボン玉のワークショップなども開催され、およそ 600 人の参加者が集まったという。

「おてんとさんまつり」にせよ「人形の森」にせよ、これらのイベントは確かに「子どもの丘」の主催であるが、「子どもの丘」のスタッフの他、プロのアーティストやパフォーマー、舞台関係者、市民サークルの方々、大学生や専門学校生など、子どもの健全育成に関心のある様々な団体や個人がつながってこれらの行事が運営されているのである。

「宮城県中央児童館はかつて児童文化活動に関してとても良いことを行ってきた蓄積があるので、その名前を出すといろいろと手伝ってくれる人がいるんです。ぼくらがあの手この手で

なんとかすれば、儲かりはしないけれど、かなり面白いことがやれるというのが、今のところの実感です」と、平山さんは話してくれた。この言葉は、「子どもの丘」の活動がこれまで積み重ねられてきた様々な団体や人々とのつながりの上に成り立っていることを示している。費用面でも外部から若干の助成を受けるものの、ほとんどは「子どもの丘」が集めた協賛金と参加者からの参加代で負担しているという。なお、児童館の運営をのぞけば、「子どもの丘」の活動は現在も 2 つのイベントの協賛金集めと企画の準備や片づけで終わってしまうとのことだった。

子どもの健全育成に関わるつながりの創出について、平山さんは次のように付け加えた。

「やりたい人がやりたいようにやるのが地域における健全育成の活動の基本ですが、(現状では）それを取りまとめたり、つなぐところがどこにもない。好きでやっているからそれでいいのだけれど、仲間も欲しいじゃないですか。仲間がいることで励みになったり刺激しあうことにつながると思うんだけど、そういうことをお世話してくれるところ、仲介役がどこにもない。それはやはり県の児童館がやれることだと思っているんです」。

子どもの健全育成にかかわるつながりを今後どのように拡大し、充実させていくか、まだまだ取り組むべき課題は多いようだ。

３．岩切児童館の指定管理者として～地域の健全育成拠点を目指して～

（１）子どもの目線にたった児童館運営

「おてんとさんまつり」や「人形の森」を開催しながらも、宮城県中央児童館の指定管理者の募集は行われないままであった。一方、仙台市が新たに建設する児童館について指定管理者の募集が始まった。指定管理者制度を導入する狙いは単なる施設管理ではなく、むしろその施設を活用するところにあるという。施設活用という観点に立てば「子どもの丘」は児童館の運営にふさわしい活動実績と人脈とノウハウを有している。なにより、児童文化活動に対する「想い」については他の団体にも引けをとらないはずである。ただし情熱だけで児童館の管理運営はできない。「子どもの丘」としては委託を受けた場合の財政上の問題や人員面での現実的な対応も含めて慎重に議論を重ねた末、最終的に公募に応募することにしたという。公募における審査を経て、仙台市から「子どもの丘」が指定管理者として指定され、岩切児童館を受け渡されたのは、文字通り年度初めの 4 月 1 日であった。

ところで、それまで岩切地区の子どもたちは、隣接の岩切小学校内にある留守家庭児童会「みどり学級」に通っていた。「みどり学級」は 25 年間続いていたが、児童館の開設によって閉鎖されることになる。一方、「子どもの丘」に先行して指定管理者となり他の児童館を運営する団体の様子を見ると、職員採用の面などにおいて隣接する小学校の留守家庭児童会との関係をまったく断ち切ってスタートしてしまっていた。つまり、子どもたちは 3 月 31 まではこれまでずっと馴染みのある指導員と一緒にいたのが、4 月 1 日になると突然見も知らぬ新しい職員に変わってしまうのである。それは大人の目からすればたいしたことではないかもしれないが、子どもたちにとってみれば大きな変化である。これについて平山さんは「子どもたちにとってはどこの団体が運営するっていうのはどうでもいい話で、大事なのは目の前に誰がいるかっていうことだ」と考え、岩切地区の子どもたちが安心して児童館を利用できるよう、児童会との引継ぎに細心の注意を払いスムーズな移行を心掛けた。このことは「子どもの丘」が子どもの視線に立った児童館の運営を志していることを示していると言えよう。

現在岩切児童館の受け入れ児童数(児童クラブに所属している子どもの数)は 2006 年 9 月現在

小学校１年生～3 年生が 53 名、月 2 回開催される幼児クラブには 0 歳児から 3 歳児まで 75 名が登録されている。今後も児童数の増加が予想されるとのことだった。

（２）地域における子どもの健全育成の拠点としての事業

この夏(2006 年)までは児童館の運営を一から立ち上げることに忙殺され NPO としての独自の活動ができなかった。しかし、ようやく運営も軌道に乗り始めたため、岩切地区の健全育成推進の拠点として運営することを最優先の目標として、様々な企画を検討しているという。

そのひとつが「連続ワークショップ」の開催である。そもそもは児童館の職員研修の一環として企画したものであったが、その道に長けた様々な講師を招くことを考えたときに、このワークショップを職員だけで独占してしまうのはあまりにももったいないと考え、「公開ワークショップ」という形にしたという。ワークショップを公開にしたことに関して、平山さんは次のようにも語っている。

> 児童館は地域に開かれている、のでどなたでもどうぞ
> ださいと言ったら、何かきっかけが来られるとないじゃないでしょ
> 何かきっかけがあって参加した人たちで何かつながりができ
> いと思っているんです。

このように、この研修会には団体の枠を超えて誰もが参加できるようにすることで、地域社会における子どもの健全育成に関わるネットワーク作りを進めていきたいという願いが込められている。そのため、「こどもにかかわるすべてのおとなのための」というサブ・タイトルが掲げられているのである。

もうひとつ、平山さんが取り組んだのは「親の会」の設立であった。特に父親を巻き込んだ活動を活発化させようと熱心に保護者に働きかけている。

平山さんは児童館に児童クラブを設立した時、絶対に「親の会」を作った方がいいと考えたという。それは、現在仙台市のほとんどの児童館の児童クラブには親の会がなく、子どもと児童館と保護者の間に有機的なつながりが見られないような状況を問題だと感じていたからである。

また仮に様々な行事の実施を思いついたとしても、それを児童館主催として行うには様々な制約から不可能な場合が多いことも、親の会を必要とする一因となっている。しかし何よりも児童の保護者を児童館の運営に巻き込んでいくことによって、より多彩で楽しい活動ができると平山さんは考えているのである。

4 月の開館以来、児童館のスタッフが保護者に対して地道に働きかけを続けた結果、6 月に父母の会が発足し、さらに前後して父親たちによる「岩切永遠の青年会　とうちゃんず」が発足した。一旦会が発足するや役員になってくれた方々は本当に面白がって一生懸命企画を考え準備に当たってくれたという。そしてこの夏には「サタデーナイトフィーバー」と

いう児童館の中に夜店を出す企画が開催され、なんと 1300 人に及ぶ地域の方々が児童館に来館するという大成功をおさめた。これと同様に 9 月末には父母会主催で児童館への宿泊イベントを予定しているとのことだった。

おわりに

岩切児童館は開設されて１年も経過しておらずまったく白紙の状態からスタートしたと言える。「子どもの丘」としても児童館を管理運営すること自体は初めてのことで、施設･設備の準備に始まり、公的な書類の作成や行政側との事務手続きの処理など慣れない業務に忙殺されながら、やっと児童館としての体勢を整えつつあるとのことであった。にもかかわらず、児童館の様々なイベントの盛り上がり方は、とても今年初めて児童館の運営に携わったとは思えないほどである。さらにここに通ってくる子どもたちの表情はみんな明るく、楽しそうに児童館を利用している。そしてそれを見守るスタッフの方々もとても優しく楽しげな表情を浮かべていた。

平山さんはインタビューの中で、もっと大人が子どもにかかわらなければいけないという焦りと危機感を口にしていた。そして子どもにかかわろうとする人たちのつながりを作り出すこと、子どもにかかわっている人たちを互いにつなげていくことの重要性を繰り返し訴えていた。そしてこの想いが「子どもの丘」と岩切児童館を盛り立てていく原動力となっていると感じられた。

「子どもの丘」としては、今後仙台市内に新しい児童館ができれば指定管理者の指定を受けたいと考え、既にその準備に当たっているという。ひとつの児童館を運営するよりは複数の児童館を運営した方が、物や本を相互利用したり、スタッフの入れ替えが可能となり、無駄な部分を省け、クオリティも上げられるのではないかと考えているとのことである。

「子どもの丘」が児童館の指定管理者として今後どのように地域の中で子どもの健全育成活動のネットワークを作り上げていくか、そして何よりも、どれだけ楽しいイベントを繰り広げてくれるのか、より一層注目されるところである。

(角替弘規)